

こんな採用担当で勘弁

就活終えた学生の声 ①

パフ（東京・中央）は新卒採用に特化したコンサルティング会社です。毎年 150社を超える企業の新卒採用に関わらせていただくとともに、イベントや就職講座の開催を中心に、年数千人の規模で学生の就職を支援しています。事業ポリシーは「顔の見える就職と採用」。くだけて言えば「企業も学生もうそをつくな！」ということです。今年の就職活動を終えた学生から寄せられた採用担当者への愛ある「喝！」を紹介します。



「そこは知っててほしかった」

「弊社は半世紀以上前から海外に目を向けておりまして、インドネシアにもいち早く現地法人を設立しています」。私立大の文系女子が会った銀行の採用担当者は、自信満々に自社の歴史を説明していました。

「なぜインドネシアだったんですか？」と質問したら、「あ、あ、あ、分かりません。すみません。調べておきます……」と急に元気がなくなりました。それまでは自信満々だっただけに残念！

若い採用担当者だったようです

が、担当者たるもの、さすがに自社の歴史くらいはきちんと学んでおかなければまずいですよね。この企業ではありませんが、創業者のフルネームを知らない採用担当者も案外いて、がっかりする学生が多いようです。

「ちゃんと内定を通知してほしいかった」

「どう？ 今日までに返事をくれる約束だったよね。腹をくくってもらえた？」。財閥系メーカーの採用担当者から、国立大の文系男子が電話を受けました。

何のことなのか分からず、「あ、あの、何の件だったでしょうか？」と恐る恐る聞いてみると、「あ、まだ内定を通知していなかったんだね。ゴメン、内定です！」。えー、こんな内定通知ありですか？

今年の採用戦線は一段と短くなりました。大手企業では担当者同士がきちんと連絡を取り合わない、こんなミスも起こりがちです。辞退が出た場合に備えて不合格を通知しない「サイレントお祈り」が問題になっていますが、こういう悪意のない「ミス・サイレント」もあります。笑えませんが、気を付けましょう。

さて、今回は人事部長や役員クラスの方々の、ちょっと笑えないエピソードをご紹介します。



パフ社長

釘崎 清秀氏

くぎさき・きよひで

84年（昭59年）明治学院大経卒。在学時から日本リクルートセンター（現リクルートキャリア）で新卒就職情報誌の営業に携わる。ソフトウェア開発会社などを経て、97年にパフを設立。大分県出身。55歳。